

織田信長の越前侵攻と朝倉義景の最期



朝倉 5 代の栄華を極めた一乗谷朝倉氏居館跡（福井市城戸ノ内町）提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

戦国時代100年にわたり越前国を支配した大名朝倉氏^{あさくら}*1は、織田信長の越前攻略に抗しきれず、天正元年（1573）8月20日、5代義景の自刃をもって滅亡した。戦国城下町一乗谷を本拠に、安定した領国経営を展開し、京都から一乗谷に多くの文化人を招いて戦国北陸の地に地方武士文化の高揚をもたらせた朝倉氏ではあったが、義景の最期には哀れを誘うものがあった。

信長の敦賀侵攻と撤退

織田信長と朝倉義景の対立は、元亀元年（1570）4月に、信長からの上洛要請を、義景が拒否したことが契機とされている。このため信長軍は、同月24日には、若狭を経て越前敦賀に迫った。一方これを迎え撃つ朝倉方は、大野・金津などの領国内の各地に4500騎を配備し、一乗谷の留守に2000余騎を残して、義景率いる14000騎の軍勢が一乗谷を出立した。

25日、織田勢は敦賀郡に侵入し、信長は敦賀の妙顕寺に陣を張り、朝倉景恒勢が楯籠る金ヶ崎・天筒山両城を攻めた。そのため同日、天筒山城が陥落、やがて景恒の防戦も空しく、26日夜には、景恒は金ヶ崎城を明け渡し、敦賀から撤退した。この合戦では、朝倉・織田双方で数千人が討死したとされる。

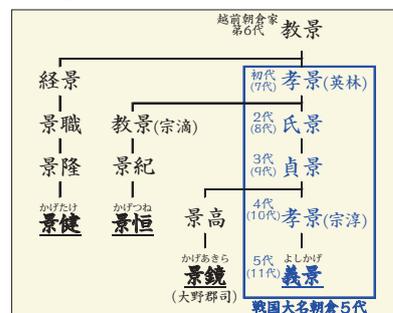
その頃朝倉義景は、敦賀に向けて浅水（現福井市浅水町）まで進軍していたが、一乗谷の内で騒動が起こったため、急遽途中から引き返すことになり、一族の朝

倉景鏡も、府中（現越前市武生）まで出馬していたものの、その先に進まず、景恒への支援をしなかった。このため敦賀から敗走した景恒は、「朝倉名字の恥辱なり」と非難され、永平寺に遁世^{とんせい}*2する。

その後織田軍は、敦賀郡内の足田城などを攻め落とし、木芽峠を越えて朝倉氏の本拠に攻め入ろうとした。しかしこの時、予てより朝倉氏と同盟関係にあった、信長の妹婿にあたる浅井長政^{あさいながまさ}*3が、近江の海津（現高島市マキノ町海津）まで出兵して、信長の退路を塞ぐとの謀叛の報が信長に届いた。そのため信長は越前からの退去を余儀なくされ、28日夜、木下藤吉郎（のちの豊臣秀吉）を殿軍（後詰）に残し、越前から撤退。30日に、若狭を経て近江の朽木經由で京都に帰った。

朝倉軍の近江出兵と姉川の敗北

織田信長の退去は、近江の政治状況に変化を生んだ。六角氏^{ろっかく}*4が勢力を盛り返し、これに浅井氏が合力して、5月11日には、朝倉義景が、一族の朝倉景鏡を大将として魚住景固・山崎吉家・福岡吉清・勝蓮花



【越前朝倉氏 略系図】（下線は本稿登場人物）

*1 越前守護斯波氏の守護代。応仁の乱を機に越前守護・戦国大名となる。特に朝倉5代は一乗谷を拠点に栄華を極めたが、信長の越前侵攻と一族の裏切りにより滅ぶ。

*2 仏門に入ること。出家。

*3 北近江の戦国大名。信長の妹お市の方を妻とし、信長と同盟を結んだが、織田・朝倉の対立で同盟を破棄。姉川の戦い・小谷城の戦いで信長に敗れ、自害する。

右京進・溝江河内守など20000余騎を、六角・浅井支援のため、近江北郡に進発させた。

一方信長は、六角承禎(義賢)との和与が不調となったため、岐阜に下ることになり、途中杉谷善住坊に狙撃されるなどの危機もあったが、5月21日、岐阜に帰陣した。このため朝倉景鏡軍は、美濃西部の垂井(岐阜県不破郡垂井町)・赤坂(現大垣市内)近辺を放火した後、6月15日に越前に帰った。

信長は、朝倉軍が近江から越前に帰ると、6月19日、岐阜より近江に出兵し、同月21日に浅井氏の本拠小谷城を攻め、城下を焼き払った。そのため朝倉氏は、再び近江に浅井氏支援の兵を派遣することになり、朝倉景健が8000騎を率いて出陣し、小谷東方の近江大依山(長浜市内)に陣取った。6月27日、姉川(現長浜市湖北町)を挟んで、浅井長政・朝倉景健軍と織田信長・徳川家康軍が対峙し、翌28日早朝から双方の間で合戦が展開された。当初は浅井・朝倉勢が優勢であったが、やがて朝倉軍が徳川方の榊原康政勢に横



朝倉義景画像
(福井市郷土歴史博物館寄託心月寺)

からの奇襲をうけて敗退したのを機に、浅井・朝倉軍が総崩れとなり、大敗した(姉川の合戦)。しかし勝利した信長も、多くの将兵を失ったため、7月8日、いったん岐阜に帰った。この合戦で、五尺(1.5m)余の大太刀をふるって奮戦した朝倉軍の真柄直隆^{※5}・隆基兄弟らが討死し、浅井・朝倉方は1100余の戦死者を出したと『信長公記』にみえている。

刀根坂合戦の大敗と義景の自刃

その後信長は上洛し、8月になって三好三人衆^{※6}を討つため摂津に向かった。これに危機感を抱いた本願寺顕如^{※7}は、三好氏と結んで信長に対抗し、浅井・朝倉氏に出陣を促した。このため朝倉義景は、9月13日、20000余騎の軍勢を率いて一乗谷を発ち、近江を経て京都に迫った。やがて室町幕府15代将軍足利義昭の仲介で、停戦工作が始まり、12月9日、義昭と正親町天皇の調停で信長と義景の和睦が成立し、義景は越前に帰った。

しかし信長と対立を続ける顕如は、翌2年(1571)

- ※4 近江南半国の守護・戦国大名。金ヶ崎での信長撤退の報を受け挙兵するが、柴田軍に敗れ信長と和睦する。
- ※5 朝倉家臣。大太刀を振り回す豪傑“真柄十郎左衛門”の名で知られ、講談や軍記物にしばしば登場する。
- ※6 天文・永禄年間に畿内・阿波などを支配した三好長慶(ながよし)配下の岩成友通(いわなりともみち)・三好長逸(ながやす)・三好政康の3人。本願寺と結んで信長に抵抗した。

6月に、朝倉氏との同盟強化をはかる上から、義景の娘と顕如の長子教如の婚約を成立させ、本願寺と姻戚関係にあった甲斐の武田信玄^{※8}とも結んで、信長の包囲網を形成した。

元亀3年(1572)7月、信長が浅井攻めに取りかかったため、朝倉義景の援軍が小谷城に入った。その後、義景の近臣前波吉継・富田長繁らが織田方に寝返る動きなどもあり、12月になって義景は、越前の一乗谷に帰陣する。

翌4年(天正元、1573)7月、義景は浅井氏救援のため一乗谷を発ち、府中・敦賀を経て、8月10日には、近江北郡の地蔵山(現長浜市木之本町)に布陣した。この日、織田信長の攻撃によって浅井方の大嶽・丁野山両城が陥落し、小谷城の浅井勢と地蔵山の朝倉軍の間が遮断された。そのため義景は越前に退去するが、途中13日夜に、近江・越前国境の刀根坂(現敦賀市刀根)で織田軍の追撃をうけて大敗し、兵力の大部分を失った。この結果義景は、敦賀から府中を経て一乗谷に戻り、自刃しようとする。しかし近臣に止められ、従兄弟の大野郡司^{※9}の朝倉景鏡の勧めで、大野に遁れ、洞雲寺に入った。そのため一乗谷は織田軍によって放火され、三日三晩燃え続けたという。

義景はやがて、景鏡の勧めで19日に景鏡の居館に近い賢松寺に移ったが、翌20日、織田方に寝返った景鏡の裏切りで賢松寺を包囲され、ここで自害して果てた。享年41歳であった。義景の最期に従ったのは、高橋景業・鳥居景近らの僅かな近臣だけであった。



姉川合戦時における「浅井・朝倉」と「織田・徳川」の関係図

- ※7 本願寺11世。信長と10年間にわたり合戦を続けたが、勅命により和議に至り、後に京に本願寺を造営した。
- ※8 甲斐の守護・戦国大名。信長に対抗するため、本願寺を介して浅井・朝倉と通ずるが、三方ヶ原の戦いで徳川・織田軍に勝利後信玄が病死。浅井・朝倉氏滅亡後、子勝頼が長篠の合戦(1575年)で敗れ、その後武田氏も滅ぶ。
- ※9 朝倉氏配下の越前で、大野郡を支配した職。